

坂本龍一選 耳の記憶 前編

選曲・執筆 坂本 龍一
 撮影 田島 一成
 インタビュー・文 後藤 繁雄
 編集 谷口 恭子(婦人画報編集部)

クリエイティブ・ディレクター 空里香

アートディレクション&デザイン 平林 奈緒美

マスタリング・エンジニア 小繼 徹(JVCマスタリングセンター代官山スタジオ)

出典 ハースト婦人画報社「婦人画報」2011年5月号～2013年4月号
 までの連載「坂本龍一・耳の記憶」より

協力 株式会社ハースト婦人画報社 婦人画報編集部

commons 若泉 久央
 信太 俊樹
 加藤 亜希子
 湯田 麻衣
 油井 誠志
 川毛 美津希
 吉村 真理奈

ゼネラル・プロデューサー 林 真司
 エグゼクティブ・プロデューサー 松浦 勝人 黒岩 克己

SPECIAL THANKS TO

株式会社キングインターナショナル
 佐藤 直人 佐藤 真吾 山口 苑子
 株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ
 古澤 隆介
 株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント
 小林 将一 渡邊 直子
 ナクソス・ジャパン株式会社
 本田 裕子
 日本コロムビア株式会社
 岡野 博行 田代 麻友
 ユニバーサル ミュージック合同会社
 阿部 香 浦田 功
 株式会社ワーナーミュージック・ジャパン
 鈴木 則孝 川村 純子

AEI 佐藤 真琴 田口 裕子 柘野 絵里子 居原 あき子 小林 壮太
 AMP 橋本 幸子

【取り扱い上のご注意】○ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。○ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。○ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いてはなりません。○ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。【保管上のご注意】○直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。○ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。

1 J.S.バッハ
インヴェンション 第一番ハ長調 BWV 772
グスタフ・レオンハルト (チェンバロ)

Johann Sebastian Bach:
Invention No. 1 in C major
BWV772
Gustav Leonhardt
(cembalo)
(Cembalo by Martin
Skowronek, Bremen
1962, after J. D. Dulcken,
Antwerpen 1745)
Recording: November
1974, Doopsgezinde Kerk,
Haarlem, Holland
Producer: Wolf Erichson
Recording Supervision:
Edda Faclum
Engineering: Dieter
Thomsen
©1975 Sony Music
Entertainment Germany
GmbH
Licensed by Sony Music
Entertainment (Japan) Inc.

2 フレデリック・ショパン
子守歌 変ニ長調 作品57
マウリツィオ・ボリーニ (ピアノ)

Frederic Chopin: Berceuse
Des-Dur Op. 57 (Chopin
Berceuse d flat Major, op.
57)
Maurizio Pollini
Recording: September,
1990
©1991 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

3 ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
ピアノ協奏曲 第20番ニ短調 K.466から
第一楽章
フリードリヒ・グルダ (ピアノ)
クラウディオ・アバド 指揮
ウイーン・フィルハーモニー管弦楽団

Wolfgang Amadeus
Mozart: Piano Concerto
No. 20 in D-minor, K.466: I
Friedrich Gulda (piano),
Wiener Philharmoniker,
Claudio Abbado
Recording: September,
1974
©1975 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

4 ヨハネス・ブラームス
3つの間奏曲 作品117 間奏曲 変ホ長調
作品117-1
グレン・グールド (ピアノ)

Johannes Brahms:
Intermezzo in E-flat major
op. 117/1
Glenn Gould (piano)
Recording: September 29,
1960, Columbia 30th
Street Studio, New York
City
Producer: Joseph Scianni
©1961 Sony Music
Entertainment
Licensed by Sony Music
Entertainment (Japan) Inc.

5 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調から 第一楽章
ヴァイルヘルム・バックハウス (ピアノ)

Ludwig van Beethoven:
Piano Sonata No. 30 in E
major, Op. 109: I
Wilhelm Backhaus (piano)
©audite Musikproduktion
Licensed by audite
Musikproduktion/KING
International Inc.
[https://www.audite.de/en/
product/2CD/23420-1_v_
beethoven_piano_
sonatas_wilhelm_
backhaus.html](https://www.audite.de/en/product/2CD/23420-1_v_beethoven_piano_sonatas_wilhelm_backhaus.html)

6 モーリス・ラヴェル
弦楽四重奏曲へ長調 第一楽章
アレグロ・モデラート・トレドゥ
アルバン・ベルク 四重奏団

Maurice Ravel: String
Quartet in F Major (1903):
First movement: Moderato
très doux
Alban Berg Quartett
©1986 Warner Classics,
Warner Music UK Ltd
Licensed by Warner Music
Japan Inc.

7 グスタフ・マーラー
交響曲 第10番 嬰ハ長調から 第一楽章
ピエール・ブレイズ 指揮
クリューヴランド管弦楽団

Gustav Mahler: Symphony
No. 10 in F-Sharp: I
Adagio
The Cleveland Orchestra,
Pierre Boulez
Recording: December,
2010 (LIVE)
©2010 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

8 クロード・ドビュッシ
弦楽四重奏曲ト短調 作品10から 第一楽章
アニメ・エトレ・デシデ
アルバン・ベルク 四重奏団

Claude Debussy: String
Quartet in G minor Op. 10:
Animé et très décidé
Alban Berg Quartett
©1986 Warner Classics,
Warner Music UK Ltd
Licensed by Warner Music
Japan Inc.

9 クロード・ドビュッシ
映像 第一集から 第二曲 ラモーをたたえて
アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ
(ピアノ)

Claude Debussy: Images I
2. Hommage à Rameau
Arturo Benedetti
Michelangeli (piano)
Recording: October, 1971
©1971 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

1
ビル・エヴァンス
マイ・フーリッシュ・ハート
ビル・エヴァンス・トリオ

Bill Evans: My Foolish Heart
Bill Evans Trio
Recording: June, 1961 (LIVE)
© 1961 Fantasy, Inc.
Licensed by UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

2
フランツ・シューベルト
ピアノ・ソナタ 第21番 変ロ長調
C大調から 第1楽章
ヴァレリー・アフアナシエフ(ピアノ)

Franz Schubert: Piano Sonata No. 21 in B-Flat Major, D. 960: I. Molto Moderato
Valery Afanassiev (piano)
Recording: Großer Sendesaal des Landesfunkhauses Niedersachsen, NDR Hannover, March 24-28, 1997
Producer: Gerhard Betz
Executive producer: Yukio Akehi
© 1997 NIPPON COLUMBIA CO., LTD.
Licensed by NIPPON COLUMBIA CO., LTD.

3
ヨハネス・ブラームス
クラリネット五重奏曲 短調
作品25から 第1楽章
レオポルト・ウラッハ(クラリネット)
ウィーン・コンツェルトハウス四重奏団

Johannes Brahms: Quintet for Clarinet and Strings in B minor, OP. 115: I
Leopold Wlach (clarinet), Vienna Konzerthaus Quartet
Recording: 1951 (monoral)
© 1952 MCA Records Inc.
Licensed by UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

1
ロベルト・シューマン
ピアノ五重奏曲 変ホ長調から 第1楽章
ルドルフ・ゼルキン(ピアノ)
ブダベスト弦楽四重奏団

Robert Schumann: Quintet for Piano, 2 Violins, Viola and Cello in E-flat major op. 44
I. Allegro brillante
Rudolf Serkin (piano)
Budapest String Quartet
Joseph Roisman (violin)
Alexander Schneider (violin)
Boris Kroyt (viola)
Mischa Schneider (cello)
Recording: September 10/11, 1963, Vermont, Battleboro
Producer: Thomas Z. Shepard
© 1965 Sony Music Entertainment
Licensed by Sony Music Entertainment (Japan) Inc.

2
クロード・ドビュッシー
組曲「子供の領分」から 第3曲
人形へのセレナード
アルトゥール・ベネデッティ・ミケランジェリ(ピアノ)

Claude Debussy: Children's Corner 3. Serenade For The Doll
Arturo Benedetti Michelangeli (piano)
Recording: August, 1971
© 1971 Deutsche Grammophon GmbH, Berlin
Licensed by UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

3
フレデリック・ショパン
幻想曲 短調 作品49
ヴラド・ベルルミューテール(ピアノ)

Frederic Chopin: Preludes, Berceuse & Fantasy in F minor
Viado Perlemuter (piano)
© 1982 Wyastone Estate Limited
Licensed by Wyastone Estate Limited

4
ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
ピアノ協奏曲 第3番 短調から 第1楽章
グレン・グールド(ピアノ)
レナード・バーンスタイン指揮
コロンビア交響楽団

Ludwig van Beethoven: Concerto for Piano and Orchestra No. 3 in C minor op. 37
I. Allegro con brio
Glenn Gould (piano)
Columbia Symphony Orchestra
Leonard Bernstein (conductor)
Recording: May 4/5 & 8, 1959, Columbia 30th Street Studio, New York City
Producer: Howard H. Scott
© 1960 Sony Music Entertainment
Licensed by Sony Music Entertainment (Japan) Inc.

5
J.S.バッハ
平均律クラヴィア曲集 第1巻
BWV846・BWV849
24の前奏曲とフーガ 第4番 嬰ハ短調
グスタフ・レオンハルト(チェンバロ)

Johann Sebastian Bach: Prelude and Fugue No. 4 in C-sharp minor BWV 849 (from The Well-Tempered Clavier, Book 1 BWV846-869)
Gustav Leonhardt (cembalo)
(Cembalo by David Rubio, Oxford 1972, after Pascal Taskin)
Recording: 1972 & 1973, Schloß Kirchheim, Cedernsaal, Germany
Recorded by Thomas Gallia
Technical equipment: Sonart, Milano
© 1978 Sony Music Entertainment Germany GmbH
Licensed by Sony Music Entertainment (Japan) Inc.

6
ガブリエル・フォーレ
レクイエム 作品48から VI われを許したまえ
シャルル・デュトワ指揮
モントリオール交響楽団

Gabriel Faure: Requiem, Op. 48: No. 6, Libera me
Sherrill Milnes, Choeur de l'Orchestre Symphonique de Montréal, Orchestre Symphonique de Montréal,
Charles Dutoit
Recording: October, 1987
© 1988 Decca Music Group Limited
Licensed by UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

4
モーリス・ラヴェル
ソナチネから 第1楽章
マルタ・アルゲリッチ(ピアノ)

Maurice Ravel: Sonatine: I. Modéré
Martha Argerich (piano)
Recording: November, 1974
© 1975 Deutsche Grammophon GmbH, Berlin
Licensed by UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

5
エリック・サティ
ジム・ノベディ 第1番
ジエローム・カルタンバック指揮
ナンシー歌劇場交響楽団

Erik Satie: Gymnopédies: Gymnopédie No. 1
Jérôme Kaltenbach & Orchestre Symphonique et Lyrique de Nancy
© 1999 Naxos Rights US, Inc.
Licensed by NAXOS JAPAN, Inc.

6
フランツ・シューベルト
4つの即興曲 作品90 D.960 第4曲 変イ長調
アレクサンドル・シュナーベル(ピアノ)

Franz Schubert: Impromptus D899: No. 4 in A flat: Allegretto
Artur Schnabel (piano)
© 2005 Digital remastering
© 2005 Warner Classics, Warner Music UK Ltd
Licensed by Warner Music Japan Inc.

7
ジョン・ダウランド
涙のパヴァーヌ いにしえの涙
フレットワーク

John Dowland: Lachrimae Antiquae from Lachrimae, or Seaven Teares
Fretwork/Christopher Wilson
© 1989 Erato/Warner Classics, Warner Music UK Ltd
Licensed by Warner Music Japan Inc.

8
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
セレナード 第10番 変ロ長調 作品262
「グラン・パルティータ」から 第1楽章
ビエール・ブレイズ指揮
アンサンブル・アンテルコンタンポラン

Wolfgang Amadeus Mozart: Serenade in B-Flat, K. 361 "Gran partita": I. Largo - Allegro molto
Ensemble Intercontemporain, Pierre Boulez
Recording: March, 2008
© 2008 Decca Music Group Limited
Licensed by UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

9
ヨハネス・ブラームス
4つのバラード 作品10から 第4曲 長調
アルトゥール・ベネデッティ・ミケランジェリ(ピアノ)

Johannes Brahms: 4 Ballades, Op. 10: No. 4 in B
Arturo Benedetti Michelangeli (piano)
Recording: February, 1981
© 1981 Deutsche Grammophon GmbH, Berlin
Licensed by UNIVERSAL CLASSICS & JAZZ, A UNIVERSAL MUSIC COMPANY

第1回

バッハ

インヴェンション 第1番

ハ長調

「生涯の友」との出逢い

僕がピアノを習い始めたのは、小学校に入ってから。音楽を聴くのが好きな子どもだったらしいけれど、まず最初に好きになった曲は？と聞かれたら、小学2年生か3年生のときに出逢ったバッハのこの曲を挙げます。ピアノを習い始めたころに先生から与えられる「課題曲」なんて、ふつうは好きではなかったりするのですが、僕はとても嬉しかった。そのよるこびの感覚は、今も自分の体の中に残っています。好きになったのは、たぶん僕が「左きき」だということが大きかったと思います。バッハの曲の多くも、右手がメロディで左手が伴奏。左手がおとしめられていると思っていたのです。ところが、15曲から成る作品を弾いたとき、左手が右手以上に重要な役割をもって書かれているのが、子どもながらにすごく嬉しかった。

その特徴がよく表れているのが、「インヴェンション 第1番 ハ長調」です。ハ長調で、たつたの2つの旋律しかない単純な曲にもかかわらず、非常に豊かな曲なのです。ピアノを教えてくださった徳山寿子先生は、右手のフレーズが左手に出てきて役割交代したりするところを「ほら、鏡みたいにひっくり返っているでしょ」と、優しく教えてくれるおばあちゃん先生でした。そうやって、自動的に作曲の勉強にもなっていたのでしょ。振り返ってみると、僕はバッハの作った音楽と長い間過ごしてきました。彼の曲をたくさん聴いてきたけれど、この曲と出逢ったよるこびは、「生涯の友」に出逢った、真のよるこびといつていい。心から「友」と呼べる人と人生で出逢えるかどうか、それはとても重要なことです。「友人」というと、バッハ先生に対して不遜かもしれないけれど、この「友」への愛情は、今も、まったく変わらない。

人は大人になるにつれてだんだん頭でっかちになります。だから、自意識が形成される子ども時代が何より大切です。この曲を弾いて、「たいして綺麗なメロディじゃない」「つまらない」という子どもたちもいることでしょう。でも、僕は飛びついた。この曲が僕の音楽の原点と、はっきり言えると思います。

第2回

シヨパン

子守歌 変ニ長調

母が授けてくれた
一枚のレコード

シヨパンの「子守歌」は僕の音楽体験の原点のひとつです。母が音楽好きだったせいで、あまりたくさんではなかったけれど、何枚かのレコードが家にありました。そのうちの一枚が、ヴラド・ベルルミュテルの弾いたシヨパンのレコードでした。

ベルルミュテルは、作曲家ラヴェルの愛弟子でした。名演奏も多く、最近まで長生きしていましたが、当時はそんなことも知らず、子どもながらに「変わった名前のピアノストだな」と思いながら、ただ好きで聴いていました。ベルルミュテルの演奏は、決して派手ではありません。ほんとうに譜面に忠実で、全く飾りのない演奏です。演奏家として優れた技巧の持ち主なのですが、それをひけらかすこともなく、一つ一つの音がとても綺麗に弾かれていて、小学校の4年生か5年生だった僕は、毎日毎日、彼のシヨパンを聴いていました。そのアルバムには「舟歌」や「スケルツォ」など、シヨパンの有名な曲が収録されていましたが、僕はこの淡々とした「子守歌」が好きでした。

シヨパンは、彼自身がピアノの名手であり、パリの社交界でも貴公子としてもはやされました。その曲は華麗なものが多いのですが、この曲は甘さが抑えられています。左手は終始同じ和音を奏でるのに対し、右手は8小節の旋律が変奏される一種の変奏曲です。最近、音楽全集「Commons: schola (コモンズ・スコラ)」シリーズを作るようになり、シヨパンを聴き直しました。

ピアノの音色の美しさからすれば、イタリヤの巨匠、ミケランジェリの演奏が僕は好きですが、この曲に関しては彼の演奏は、あまりにテンポが速すぎます。「子守歌」ですから、弾いているうちに寝てしまうくらいがいい。その感じはボリーニが一番出せています。

それから、僕の好きなジャズピアノニストのビル・エヴァンスの曲に「Peace Piece」というのがあります。これはじつはシヨパンの「子守歌」にそっくりなのです。エヴァンスは子どもころから「ピアノの神童」といわれていたもので、当然、シヨパンを弾いていたのだらうけれど、似ている。聴くたびに、微笑ましいというか、嬉しい気分になります。純粹に、音楽のよろこびを感じますね。

第3回

モーツァルト

ピアノ協奏曲第20番

二短調

神に一番近い、
モーツァルト

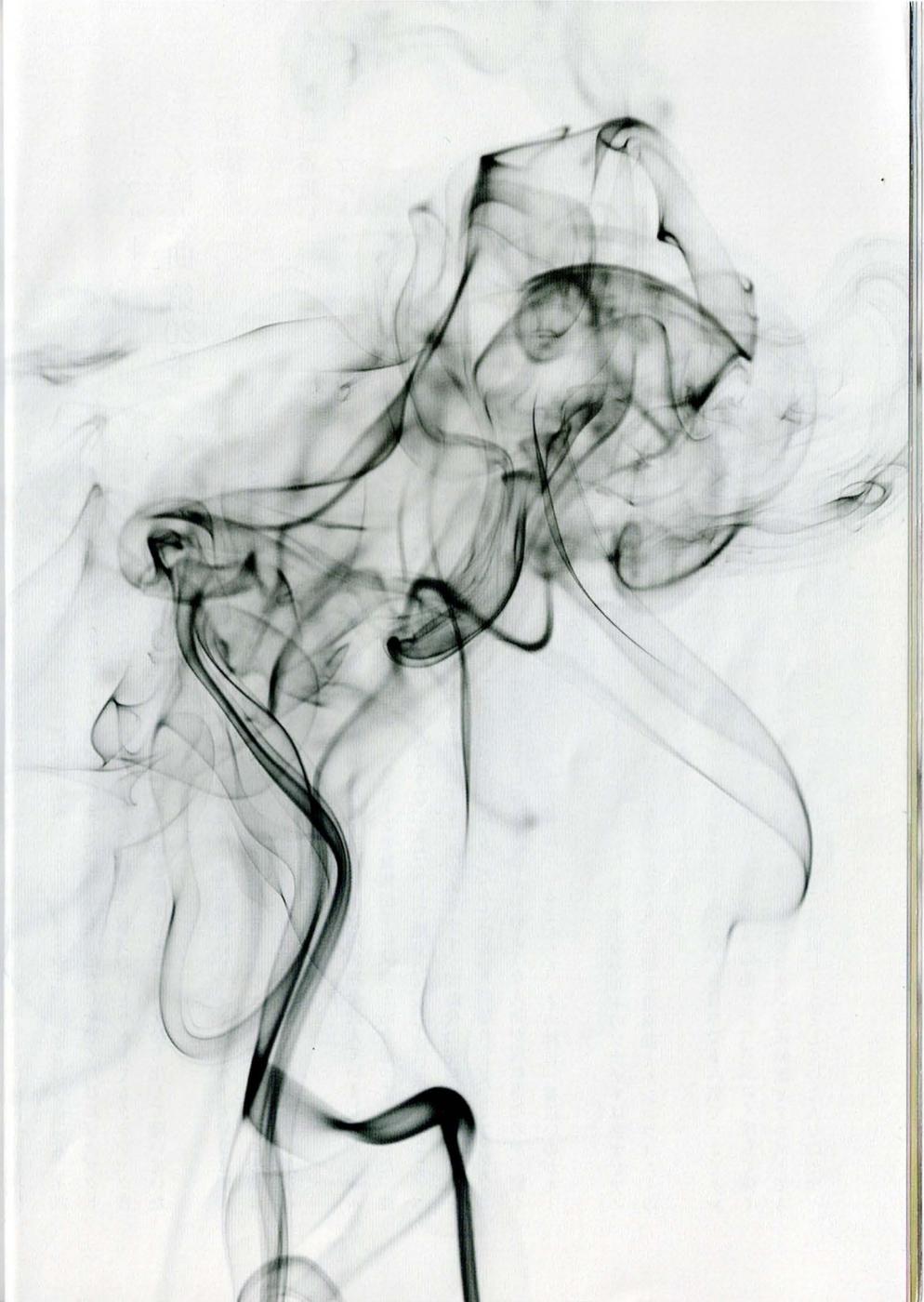
モーツァルトは僕にとって特別な作曲家。とりわけ、この二短調の「ピアノ協奏曲第20番」は、子どものころからよく聴いていましたが、今も、出だしを聴くたびにゾクゾクします。誰の演奏だったのか、忘れてしまっただけで、叔父のひとりごとでもクラシック音楽好きで、僕は叔父の部屋に忍び込んで、好き勝手にレコードを持ち出して聴いていたので、その中の一枚だったのでしよう。

モーツァルトの曲から、どれを選ぶかはほんとうに難しいし、モーツァルトというと優美で華麗、明るい曲というイメージを誰もがもつと思います。しかし、彼にとって二短調は特別な調で、彼が二短調で書くときは、必ず悪魔的な側面が顔を出す。たとえば、最後に書いた未完成の「レクイエム」もそうです。

この二短調のピアノ協奏曲を作曲したモーツァルトは円熟期を迎えていましたが、ザルツブルグから追い出されてしまい、ウィーンで貴族相手に演奏生活を送っていましたが、彼の音楽には「ドン・ジョバンニ」のような、女たらしで地上の快楽を追い求めるところと、地獄に落ち、人間の深層をむき出しにする二面があります。同時代の先輩格のハイドンと比べても、いや歴史上のどの作曲家と比べても、だんとうに人間離れしたところがある。悪魔か神か。聴けば聴くほど、どうしてモーツァルトのような人物が現れたのか、驚くべきことと思われまます。僕にとっては、もし神がいるとしたら、その神に一番近いのがモーツァルトだと思います。

家にはピアノのレコードがたくさんありましたし、モーツァルトのソナチネは必ずピアノの稽古で弾きました。中学生、高校生になってからも、弦楽五重奏曲とかシンフォニーの楽譜を買ってきてピアノで弾いてみたりしました。

今回選んだフリードリヒ・グルダは、僕が子どものころから日本でも人気で、よくテレビで見っていました。そのときの印象としては、クラシックの曲をジャズ風にくずして弾く変なおじさんという感じでしたが、じつはれっきとしたウィーンの正統派ピアニストでもあるんですね。ただそれに飽き足らず、新しいことに挑戦しようとしていた人なのです。



第4回

ブラームス

間奏曲 第一番 変ホ長調

グールドのブラームスに
感じた「禅の境地」

僕は子どものころ、じつは「ロマン派」の作曲家の作品をあまり聴きませんでした。ペー
ト・ヴェンからドビュッシーに飛んでしまったんです。それでもブラームスや、先輩格の
シューマンは好きでした。とりわけブラームスの間奏曲にはまったのは、ピアノスト、
グレン・グールドによるものでした。どうやってグールドの音楽に出合ったのかは覚えて
いないのですが、気がついたら家にレコードがあったんです。彼が最初に録音したのが、
有名なバッハの「ゴルトベルク変奏曲」で、その後も彼のレコードが出るたびに聴いてきま
した。

グールドは、デビュー後の初期は、自分が特に好きな曲を矢継ぎ早に録音していて、そ
こにブラームスの間奏曲もありました。「ゴルトベルク変奏曲」は難曲だし、グールドが弾
くまであまり知られていませんでした。そして、ブラームスの曲も、ブラームス晩年のも
ので、普通なら老境のピアニストが録音するような地味な曲なのに、弱冠20代のピアニス
トであるグールドが出したわけです。常識的じゃないというか、彼の反骨精神です。よ
ね。とにかくグールドにはまってしまつて、グールドがピアノを弾くときに、鍵盤に顔がつく
ぐらいに猫背になるあのスタイルを小学生なのに真似していたんです。僕のピアノの先生
は、「なんて悪い姿勢でピアノを弾くんか」と、毎回カンカンに怒っていました。

ロマン派やブラームスというところ、非常にロマンチックで激情的なスタイルが特徴とされ
ています。ところがこの間奏曲はものすごく「枯れた」曲です。「達観した晩年の境地」と
いう印象でしょう。でも、じつはギリギリまで抑圧することでエモーションを表現してい
ると思います。この曲から僕が連想するのは、意外に聞こえるかもしれませんが、アント
ニオ・カルロス・ジョビンの「レス・イズ・モア」という言葉。見方によっては、とても「禅
的」です。カナダという土地の影響もあるかもしれませんが。面白いことにグールドは、夏
目漱石の『草枕』が好きで、同じ本を2冊買って、1冊はポロポロになるまで読みこんで
いたそうです。ヨーロッパのロマンティズムと東洋的ともいえるセンスのグールドによる
ブラームスは、そんな面白さを僕に教えてくれるのです。

第5回

ベートーヴェン

ピアノ・ソナタ 第30番

ホ長調

ベートーヴェンが求めた
「自由」

僕のベートーヴェン熱は、小学校に入ってからずっと続いていました。よく聴いていたのは後期の3つのピアノ・ソナタ、第30番、31番、32番。そして、「ピアノ協奏曲 第3番」にはまってしまい、半年ぐらい、毎日聴いていました。子どものころ、譜面というものはピアノの先生が与えてくれるものだったので、ベートーヴェンの「ピアノ協奏曲 第3番」は、どうしても譜面が見たくて、たしかデパートの譜面売り場に行って買ったような記憶があります。たぶん中学1年生くらいかな。すごくはまって、とうとうそっくりの曲を作ってしまった。誰が聴いてもそっくり。でもすべては真似から始まりますからね。

中学に進学したとき、最初、バスケットボール部に入りました。背も高かったし、バスケットシューズが格好いいと思っただけです。でも、毎日のように突き指をしてしまう。小さいころから6年間続いていたピアノをやめるか、バスケットをとるか。選択を迫られてピアノをやめたんです。どれくらい期間やめていたのか、今となってはよく思い出せないけれど、もう一度、音楽をやりたいと思ひ、結局、バスケット部をやめました。上級生にすごく怒られたけど、それから音楽がほんとうに好きになったのですが、やっぱり最初の曲は、ベートーヴェンでした。

今回取り上げた「ピアノ・ソナタ 第30番」は、獅子王とも呼ばれた名手、ヴィルヘルム・バックハウスが弾いたものです。これもたまたま家にあつて聴いていました。この30番が一番好きなのですが、じつは、この曲はベートーヴェンの中では、あまりベートーヴェンらしくない。彼は100の可能性の中からひとつだけテーマを選んできて、無骨なテーマをわざわざレンガのように積み上げていき、壮大な曲を書くことに一生懸命、挑戦した人です。ところがこのソナタの第1楽章は、ベートーヴェンにしては常識的な和音運び、なおかつテーマらしきものがなくて、表面的に見ればドビュッシーのアラベスクを先取りしているような軽やかさがある。グレン・グールドがこの曲を好きだったのも、「面白い」

なぜ、ベートーヴェンが厳格な形式主義を逸脱したのか、とても不思議です。その「自由」へと踏み出しているところが、好きだと思ひ秘密かもしれない。



第6回

ラヴェル

弦楽四重奏曲へ長調 第1楽章

子ども心に刻まれた
「特別な音楽」

前回、中学時代にベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第3番」に半年ぐらい、はまっていたと書きましたが、その次にはまったのがラヴェルとドビュッシーでした。ある日、叔父のレコードを引っぱり出していたら、知らない作曲家のアルバムがあって、そのA面がドビュッシー、B面がラヴェルのふたつの「弦楽四重奏曲」でした。

最初に聴いたとき、すごい衝撃を受けました。今まで全く聴いたことがなかった音楽なのです。そのころは作曲も習っていたので、ある程度、音楽の知識があったのですが、どう書かれているのかがわからない。メロディも聴いたことがない感じだし、小学校5年生くらいから聴きまくっていたビートルズなんかとも違う。いつべんにこのふたりが好きになりました。

ラヴェルはドビュッシーより、ひと回り若い世代です。ドビュッシーが倍音（基本となる音の整数倍の周波数をもつ音）を活用し、ふつくと豊かな音楽作りをするのに対して、ラヴェルの音楽はメカニカルでクリアカット、一分の隙もないぐらい精巧に作られています。お父さんがエンジニアだった影響もあるのかもしれませんが、ドビュッシーの「弦楽四重奏曲」は、ラヴェルより10年ぐらい前に書かれています。ラヴェルはそれを超える作品を書こうとしました。とてもハードルの高い挑戦なのに、すごく静謐で、洗練されていて、優美なんです。ふつう、弦楽四重奏曲というと、円熟期とか晩年のジャンルなのですが、ラヴェルがこの曲を書いたのは27歳か28歳だから、驚かされます。ジャズの気配もあるし、非常にポップだし、いろんな要素が入りこんでいる。ラヴェルはフランスの作曲家だけれど、母親はバスク人で、彼が活躍した20世紀初頭は、スペインやロシア、東欧のエキゾチックな音源だけでなく、黒人たちが生み出したジャズなども混ざり合った時代。彼はそれらの要素を、機械人形を作るかのごとく精妙に構築していきました。

彼の音楽は、戦後のポップスやジャズにも大きな影響を与えています。僕自身も、もちろん影響はされているけれど、「絶対に真似してはいけない音楽がある」と、子ども心に刻みこまれた「特別な音楽」なのです。



第7回

マーラー

交響曲第10番

第1楽章 嬰へ長調

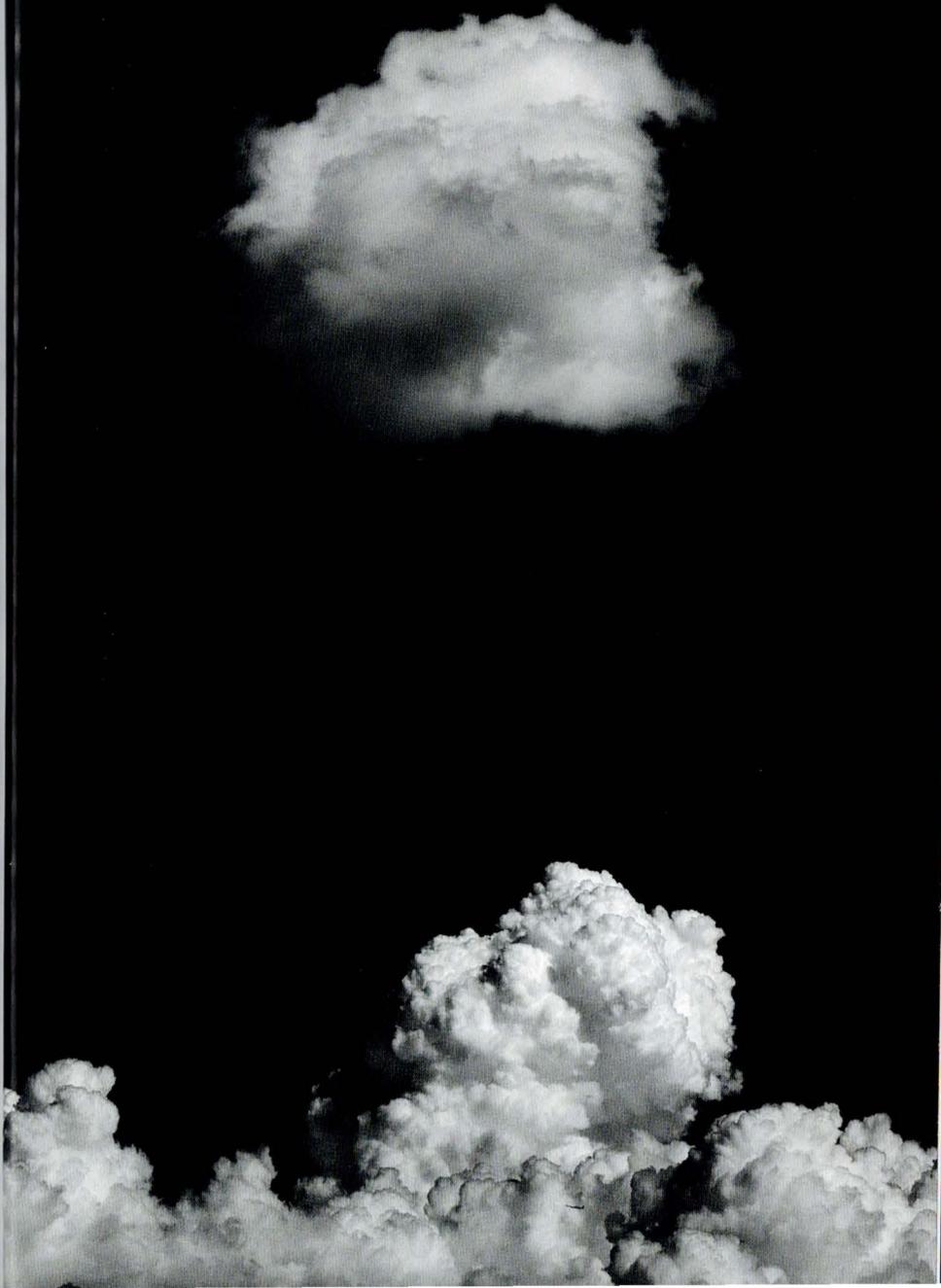
波瀾の人生を映しだす
未完の交響曲

じつはマーラーは、最近まであまり聴いてこなかったんです。子ども時代に、ベートーヴェンにはまったあと、いきなりドビュッシーに飛んでしまったので、「ロマン派」全体をずっと敬遠してきたのでしよう。もちろんショパンやシューマンは聴いていたし、特にブラームスは「古典派」の忠実な弟子のようなところがあって、とても好きでした。しかしシューベルトやブルックナー、ワーグナーやマーラーは、曲も長大だし、テーマも生や死といった大げさなものが多い。だから意識的に聴きだしたのは、音楽全集「Commons: schola (コモンズ・スコラ)」シリーズの監修を始めたことがきっかけです。

僕が10代から20代を迎える1970年代は、今振り返ると、まだまだ「前衛的なもの」のほうがいいんだ」という歴史観が強く、「ロマン派」は古くさくて顧みる必要はない、20世紀の僕たちはドビュッシーから始まっているんだから、聴く必要なんてないと思っていた。でも時代は変わりました。もう「進歩史観」なんて通用しないわけですから。僕もフラットな気持ちでマーラーを聴けるようになりました。

マーラーは、指揮者で作曲家でしたが、波瀾万丈の人生で、それが曲にも反映されています。19世紀にはワーグナーの音楽が時代を支配し、ドビュッシーがそれをひっくり返して、20世紀への扉を開いた。マーラーもまた19世紀的なものから抜け出るためにあがいた「逆者」のひとりでしょう。マーラーの「交響曲第10番」は未完です。残されたスケッチをもとに、のちの人が完成させた譜面もありますが、本人が書いたのは第1楽章だけ。僕はこの冒険的な曲が好きです。

ブルーノ・ワルターをはじめ、マーラーの曲を振ってきた名指揮者の系譜があるのですが、僕は全然違う分野から殴り込みをかけたビエール・ブレーズのマーラーの録音をよく聴きます。20世紀の音楽はドビュッシーらのフランスと、シェーンベルグ、ベルク、ウエーベルンら新ウィーン学派のふたつの流れから始まっています。ブレーズがシェーンベルグ以前に溯り、マーラーを見直す視点が、とても面白いと思います。



第8回

ドビュッシー

弦楽四重奏曲 ト短調 作品10 第1楽章

ドビュッシーの響きに見た
「世紀末のパリの空」

中学2年生のときでした。前にも書きましたが、当時、僕はすっかりベートーヴェンにまっていたんです。たまたま何気なく手に取ったレコードは、ドビュッシーの「弦楽四重奏曲」が収録されたもので（ちなみに裏面はラヴェルの「弦楽四重奏曲」）、針を落とすとたん衝撃が走りました。それまで聴いたことのない類の音楽でした。パッハやモーツァルト、ベートーヴェンの音楽の基本となっている、和音や調性というものは、まるで違っている。出だしから、長調でも短調でもない「主題」が出てくるのですが、「なんだこれはー」と思っても、子どもの知識では説明すらできない。理解できたのは、数年後。その主題に使われていたのは、「ギリシア旋法」の一種でした。

ドビュッシーの「弦楽四重奏曲」のいろいろな部分が、本当に不思議な音に満ちていて、それは楽譜上のことだけでなく、演奏法自体もユニークでした。「ひらひらした音」とか、「裝飾的」だけれど、パッハやモーツァルトとは違う。ドビュッシー自身は、それを「アラベスク」と呼んでいます。あとから考えると、それはある種、ロマン派の中で発展したものを受け継いだ面があります。もとはリストの影響だったのでしょうか。リストはピアノの名手で、たとえば、ピアノで噴水の水が戯れる状態を表現しました。そういう演奏法がこの作品にももち込まれています。ドビュッシーの音楽は、ラヴェルのクリアさと比べると、ややもやした霧や煙のような感じです。ラヴェルを20世紀的というなら、年長のドビュッシーは19世紀的のいいと思います。その革新性は今でも驚くべきものだと思います。この「弦楽四重奏曲」は、すべての楽章がそれぞれ面白い。とりわけ第3楽章のアダージョは、とてもゆっくりしていて、かつ「弱音器」という、音をミュートする装置を弦楽器につけて、ほんとうに煙ったような音色を作り出しています。

中学2年生ですから、もちろんパリに行ったことなんてありません。でも19世紀の、たとえば晩秋の、灰色の雲がたちこめたパリの空。体験なんてしてないのに、なぜか見たこともない「世紀末のパリの空」を、僕はドビュッシーの響きの中から想像したのです。

第9回

ドビュッシー

映像 第1集

第2曲

ラモーをたたえて

「映像」から浮かび上がる
「古代への憧憬」

「弦楽四重奏曲」でドビュッシーに出逢って以来、僕はすっかりドビュッシーに夢中になってしまいました。子どもでしたし、ドビュッシーの全貌はわからなかったもので、とにかく手に入る楽譜は手当たり次第に買って弾き始めました。たまたまデパートの楽譜売り場で買ったのが「映像」でした。「映像」の全6曲はどれも好きだし、面白い。でもとりわけ気に入ったのが、「ラモーをたたえて」。この曲は、ゆつくりとしたテンポで、とても不思議な印象を残します。「弦楽四重奏曲」に比べたら、メロディがわかりやすく、子どもが聴いても親しめる。ポップなんです。それほど難しくもないので、よく弾きましたね。

ドビュッシーは、若いころ、つまり19世紀の終わりに「弦楽四重奏曲」を作曲しますが、「映像」を書いたのは20世紀に入ってから。有名な「交響詩『海』」の少しあとに手がけます。「映像」からは時代の変化、ドビュッシー自身の変化が感じられます。「弦楽四重奏曲」には、19世紀の「世紀末的な匂い」があるのですが、「映像」までくると、「古代エジプトの世界」や「ギリシヤの世界」への回帰が出てきます。「古代の響き」がするんですね。水面の光の戯れみたいな、音楽が今までとらえられていなかった複雑な運動を彼は表現しようとするのですが、そのとき、「古代への憧憬」が同時に浮かび上がってくるのが面白い。

パッサがドイツ音楽の父だとしたら、ラモーはフランス音楽の父ともいえます。ですから「ラモーをたたえて」というのは、そのラモーへのオマージュであり、19世紀を支配したドイツ語圏の音楽への強烈な「否(ノン)」も意味します。

さて、演奏のことですが、やはりミケランジェリのピアノです。彼は徹底的に音が磨き上がって完成するまで自分の部屋から出てこないで、ひたすら練習し続ける演奏家だったそうです。彼のレコードは10代のときから大好きで、よく聴きました。ものすごいテクニクがあるのだけれど、それをひけらかさず、ほんとうに譜面の細部まで丁寧に丁寧に演奏する。とりわけ音色は最高に美しい。彼が弾く「ラモーをたたえて」は、ものすごく難しい曲にもやさしい曲にも聴こえます。ぜひ聴いてください。

第10回

ビル・エヴァンス マイ・フリーリッツユ・ ハート

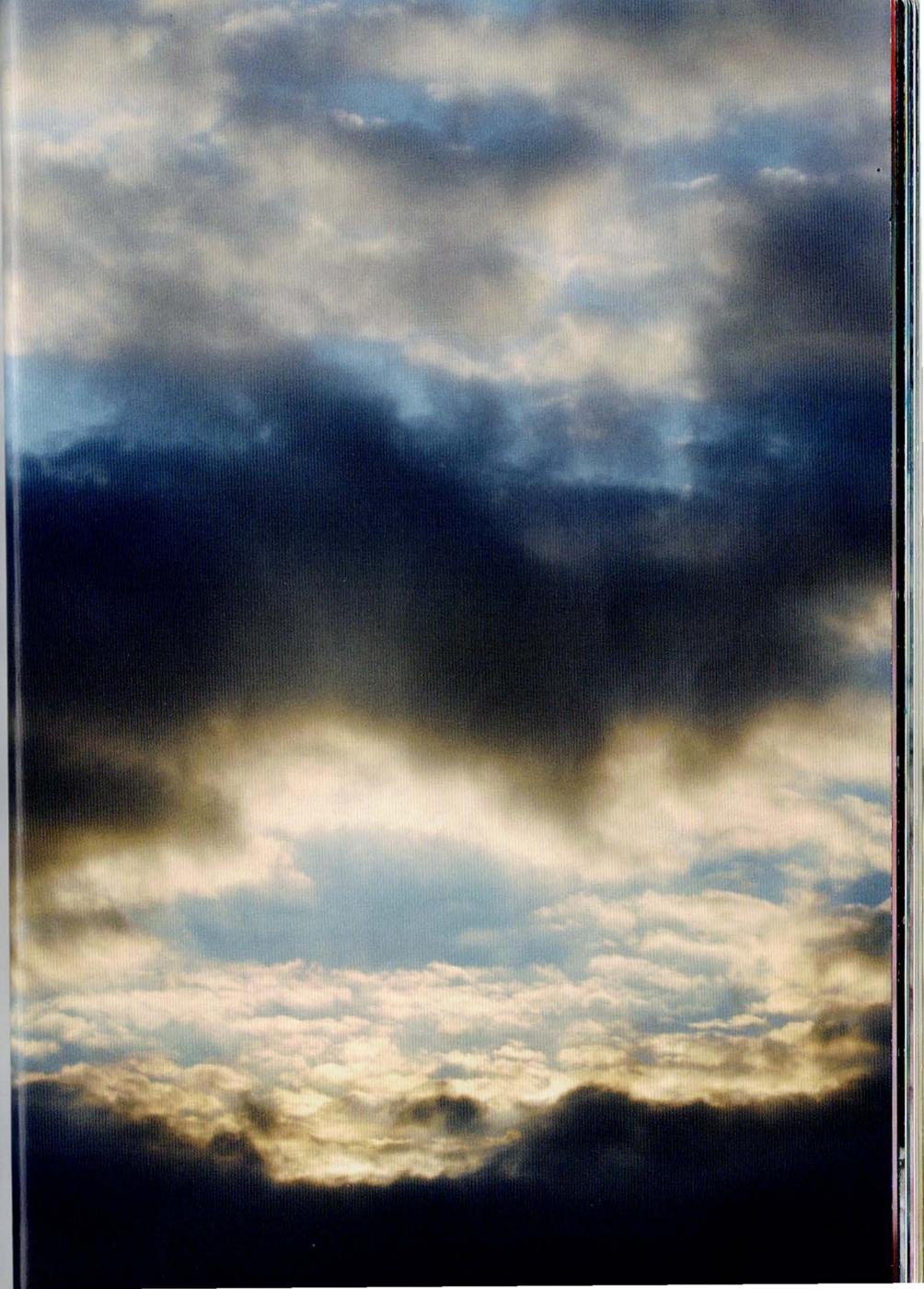
高度な技術が生み出す
究極のリリシズム

ジャズピアニスト、ビル・エヴァンスのアルバム「ワルツ・フォー・デビー」に取められた「マイ・フリーリッツユ・ハート」。もともとこれは、ビクター・ヤングという、映画音楽やミュージカルのヒット曲をたくさん飛ばした作曲家のスタンダードナンバーでした。スタンダードを即興で演奏するのはジャズの伝統ですが、僕はオリジナルではなく、エヴァンスの演奏を愛しています。もう出だしのEの音から「リリシズム」が溢れている。彼はすごいテクニシャンだし、スイング感もリズム感もとてもいい。でも一番の特徴は、タッチとハーモニーの美しさ。特にこのころの録音は、ベーストであるスコット・ラファロという盟友との演奏。残念にもラファロは、このあと交通事故で死んでしまい、エヴァンスは大きく傷ついたので……。

ジャズは大衆的だし、アドリブによる即興が主体なので、クラシックや現代音楽より低く見られてきましたが、ものすごく高度な音楽です。エヴァンスの演奏はじつによく考え抜かれています。背景にある理論が、すごくしっかりしている。

僕が人生の中で一番ジャズを聴いたのは、新宿高校時代。当時、新宿といえばジャズのメッカで、高校に入学した4月にジャズ喫茶30数軒を全部回りました。そして一番好きなのは、3軒を決め、ライブは高くて行けなかったけれど、昼休みにレコードをかけているほうの「ビットイン」によく行きました。学校が終わってから、また戻り、大学生のお兄さんたちがふかす煙草の煙がモクモクの中で聴いていましたね。

60年代は荒々しい激動の時代。ジョン・コルトレインの晩年のフリージャズにシンクロしていました。そんななかでビル・エヴァンスの音楽は乙女チックでリリカル、軟弱という感じだったかもしれませんが。宝石みたいにキラキラして美しいものよりも、破壊的で過激なものが好まれたのです。僕も当時はそう思っていたかもしれませんが。けれど、あとになって少し離れて冷静な耳で聴いてみると、エヴァンスが、じつに高度なことをやってたことに驚かされるのです。



第11回

シューベルト

ピアノ・ソナタ 第21番

変ロ長調

死を前にした「晴朗さ」と

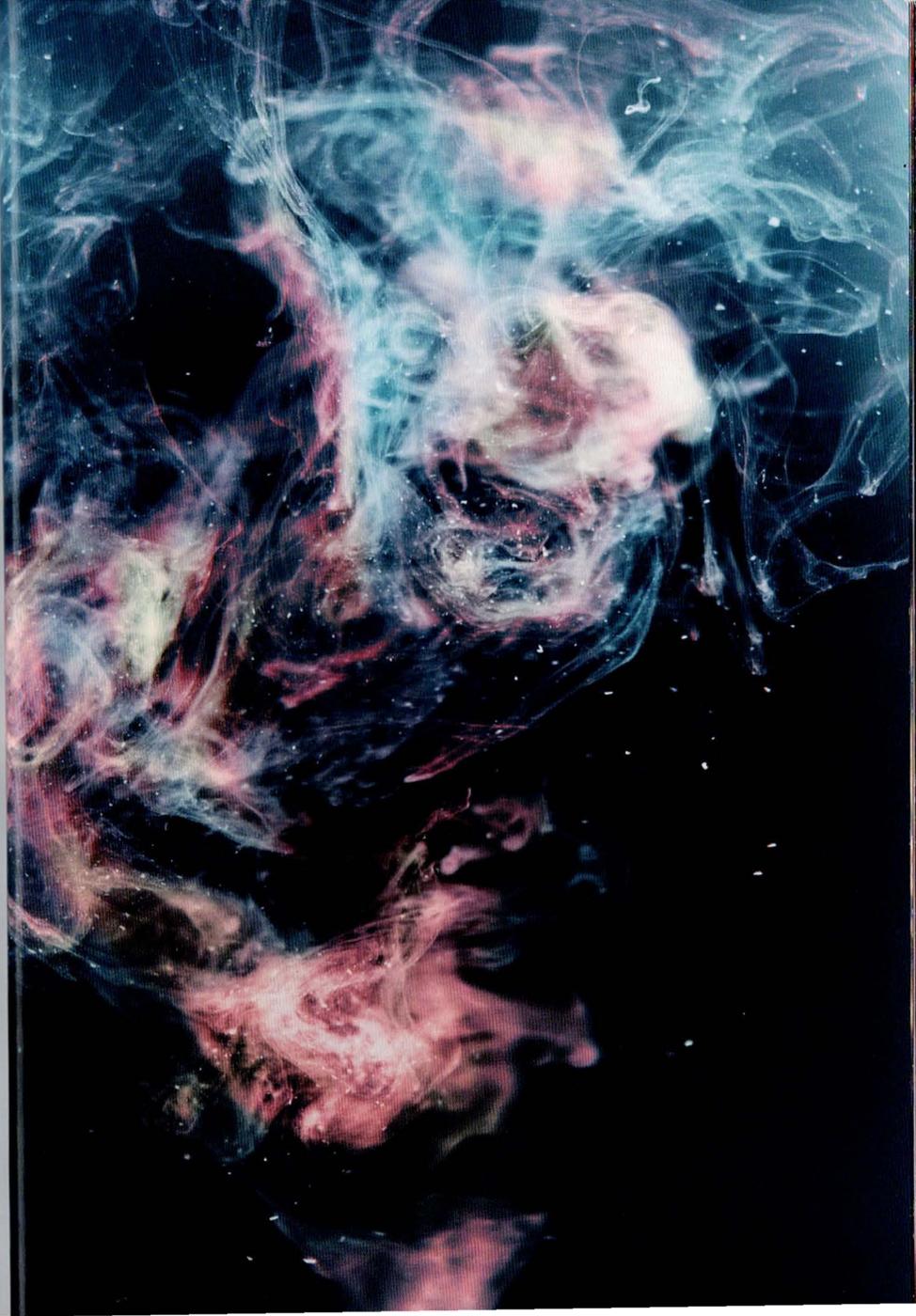
「もののあはれ」

僕は子どものころからロマン派に興味がありません、あまり聴いてきませんでした。唯一、古典的なブラームスとその師匠筋にあたるシューマンぐらいで、シューベルトはあまり好きではなかったし、最近までほとんど聴いてこなかった。

ところが数年前に出逢いがありました。たまたま京都で、ピアノリストのヴァレリー・アファナシエフのドキュメンタリーの撮影現場を見る機会があったのです。晩秋の京都のお寺で、紅葉がライティングされていました。とても寒い日で、彼は直前までお湯で指を温めて、用意されていたピアノを弾きました。そのときはシューベルトを弾いたわけではなかったのですが、非常に身近な存在に思うようになりました。じつは以前から、彼の弾くブラームスの「間奏曲」を聴いていて、面白い人がいるんだなと思いつつ、少しずつCDを聴いていたのです。僕にとってこの曲は、グールドが弾いたものが絶対だったのですが、さて後日、番組を見たときに、アファナシエフが語っていたのが、シューベルトの遺作となった「ピアノ・ソナタ 第21番」のことでした。それがきっかけとなり、いろいろな人が弾いたシューベルトのCDを集めるようになりました。高橋アキ、シフ、リヒテル、内田光子、シュナーベルなどなど。それら多くの優れた演奏の中でも、アファナシエフのものは特異でした。彼はとても遅く弾くのです。この「第21番」は、文字通り、若くして死んだシューベルトの「白鳥のうた」。とても透明で長い。その曲を彼はあえて遅く弾くので、ますますほかにないものになるんですね。アファナシエフはソ連時代に西側に亡命しましたが、70年代のモスクワでは一時期、「ノスタルジック」なムードを重視する芸術家の一派が流行したらしいのです。彼はそれを引きずっていた。しかも、故郷ロシアへの郷愁もあったのでしよう。

それからもうひとつ言っておくと、彼は『源氏物語』など日本の古典文学もとてもよく読んでいて、「もののあはれ」や「わび」「さび」の感覚を知っているんです（ちなみにグールドの夏目漱石への愛着はよく知られていますね）。これらのことがアファナシエフのシューベルトの演奏には色濃く反映されているのを感じます。死を前にしたシューベルトがたどり着いた晴朗さ。にもかかわらず、そこには「もののあはれ」が、とてもよく表さ

れていると思います。



第12回

ブラームス

クラリネット五重奏曲

口短調

複雑な音の重なりが生む
哀愁と優雅さ

さて今月は、ブラームスが晩年に書いた「クラリネット五重奏曲」です。きっと最初は、ラジオか何かで聴いたのだと思います。冒頭のテーマの旋律も、とても覚えやすいですし、小学生のころから大好きな曲でした。パツハにも口短調のミサ曲がありますが、このブラームスの曲も非常に悲しい響きがあります。クラリネットの音には、清らかな感じや、欲のない感じがありますが、ブラームスはその特徴を見事に活かして、じつに枯れた哀愁感を表しています。「なんて寂しいんだろう」。子どもだったので、そういう感情が引き起こされる理由はわからなかったのだけれど、とにかく、寂寞や哀愁にとっても惹かれました。

前回紹介したピアノソートのアフアナシエフやグールドも、彼らはブラームスをよく弾いています。「北国の人」ならではの共通した瞑想的なところがある。ブラームスは、北海道にほど近いハンブルクの生まれです。冬には雪がすこく降るし、空港も閉鎖になって飛行機が飛ばないこともよくあると聞きます。そんな長い冬を家の中で暖炉にあたりながら、静かに生活する。そんなイメージを彼の曲は思い抱かせるんですね。僕は、この「クラリネット五重奏曲」の演奏は、圧倒的にウラツハの古い録音のものが好きです。音色も素晴らしいし、非常に抑制が効いている。それでいてのびやかで、だけど枯れている。清らかなけれど複雑な表現があります。今の時代にはなくなってしまった優雅さですね。

音楽の素晴らしさやよこびは、ある音が重なるだけで、とても複雑な感情が呼び起こされるところにあります。音の数は、言葉に比べたら少ないのに、言葉ではとても表現できないような、感情のひだや、深遠なことが表現できるんです。最近の小学校などでは、ますますクラシック音楽を聴く機会は減っています。音楽の教科書に載った課題曲もアニメの主題歌ばかりです。でも音楽との出会いや体験は、子ども時代に聴いたものが決定的になる。「schola」という名の、新しい「音楽の学校」シリーズを始めたのもその思いからです。子どものころは、ピンとこなくても、大人になるにつれて、その味わいがわかるものもたくさんあります。だから体験しておかなければいけない。音楽のよこびは、長く深いものなのですから。

第13回

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲第3番 ハ短調

ふたりの天才による
世界一美しいコンチエルト

僕が作曲を習い始めたのは、小学5年生のときです。最初はあまり興味がなかったのですが、中学1年生で、このベートーヴェンの「ピアノ協奏曲第3番」に出会い、すごく好きになって毎日のように聴いていました。たぶん、バックハウスの演奏だったと思います。譜面をすぐに買いに行つて、半年ぐらい、譜面とにらめっこしながら、とにかく聴き込みました。主題となる旋律は比較的単純ですが、どうやってこんなに長大な曲が生み出されるのか、そこが知りたかった。音の重ね方など、技術的なことを研究しようと初めて取り組んだ曲なので、感慨深いですね。

ベートーヴェンのピアノ協奏曲では、5番の「皇帝」が有名ですが、僕は3番や4番が好きです。4番は非常に流麗で、ある種女性的。それに対して3番はハ短調で、とても男性的で決然としています。この曲は1800年という世紀の節目に作曲されたこともあり、僕はその100年後に書かれたドビュッシーの音楽と、よく対比させています。

さて今回の演奏は、グレン・グールドのピアノとレナード・バーンスタイン指揮によるものを選びました。最近、村上春樹さんと小澤征爾さんの対談集「小澤征爾さんと、音楽について話をする」が出ましたが、興味深い本でした。小澤さんがグールドと共演したときのエピソードを語ったり、村上さんもベートーヴェンのこの曲が好きで、いろいろな人の演奏を聴き比べているのが面白かった。

グールドはほんとうに特別なピアニストでした。バーンスタインとの共演のエピソードで有名なのは、ブラームスの「ピアノ協奏曲第1番」の演奏会時のこと。バーンスタインが演奏を始める前に、聴衆に向かって「今からやるのは私のスタイルではない。コンチエルトにおいて、ボスは誰なんだ？ 指揮者か、ソリストなのか？」と語りました。でも、このベートーヴェンの協奏曲では、ふたりの息は一転してとてもよく合っています。じつはグールドとバーンスタインは互いにとても尊敬し合っていて、バイセクシャルであったバーンスタインは「世界一美しいピアニスト」なんていう言葉をグールドに贈ったりしているのです。

第14回

バッハ

平均律

クラヴィーア曲集 第1巻

第4番 嬰ハ短調

BWV 849

旧約聖書ともいうべき

バッハの「平均律」

バッハの「平均律クラヴィーア曲集」は、子どものころから、よく聴いたり、弾いたりしてきました。「平均律クラヴィーア曲集」は「旧約聖書」、それに対してベートーヴェンの「ピアノソナタ集」は「新約聖書」にたとえられたりもしますが、「平均律」はほんとうに「聖書」の名に恥じないぐらい、どれをとつても素晴らしい曲が詰まっています。僕は圧倒的に「短調」のものが好きだったりするのですが……。

この連載を毎号お読みの方は、気づかれているかと思いますが、これまでご紹介した曲は「ハの音」、つまり「ド」から始まり、その次は半音上がって「ド#（嬰ハ）」になり（今回はそれにあたります）、「レ」へと上がって行き、最後は「シ」で終わる仕組みとなっています。「平均律」というものには、半音ずつ12の「調」があり、ひとつの「調」について「長調」と「短調」があるので、 $12 \times 2 = 24$ の曲が作られているわけです。それが「第1巻」と「第2巻」の2巻もあるという長大なものです。彼はその長大なものを一度に作曲したわけではなく、折々に作っていました。

僕はこれと、「フーガの技法」が特に好きで、今もよく弾きます。バッハとはずいぶん違ってみえるドビュッシーは（彼はバッハを絶賛していました）、バッハの音楽を「アラベスク」と言いました。ふつうバッハの音楽はその構築的、理論的な面を評されることが多いのに、それを「装飾的」とは！ さすがはドビュッシーだと、驚いたものです。

今回は、レオンハルトのチェンバロによる演奏を取り上げました。惜しくも今年1月に83歳で亡くなりましたが、僕は2年くらい前に、彼が来日したときに聴きにきました。レオンハルトはアーノンクールと並ぶ「ピリオド奏法」の音楽家です。「ピリオド奏法」とは、曲が作られた当時の楽器と演奏法を再現しようというものです。彼は60年も前にそれを始めたバイオニアなのです。19世紀のロマン派や20世紀の大衆化などによって、編成が大きくなり、「シユガーコーティング」され、「原曲」の上に分厚い砂糖がかかった形で僕たちは音楽を聴いてきました。だから、原曲とは響きがいぶん違っていったのです。僕が「ピリオド奏法」を知ったのはこの20年ぐらいのことですが、とても新鮮だったのをよく覚えていきます。

第15回

フォーレ

レクイエム 作品48 VI

「リベラ・メ」

神への祈りを切々と歌う
「レクイエム」

「レクイエム」は、死者に対するミサ曲です。本来カトリックのミサは、「一言一句、非常に厳密に全部決まっています。ところがフォーレの「レクイエム」は、今では「三大レクイエムのひとつ」といわれるぐらいの曲ですが、わりと自由に書かれていて、ミサを執り行うために書いたというより、むしろ音楽として書いたという感じ。初演はパリのマドレーヌ寺院ですが、そのときは、「フォーレのレクイエムは死者に対する畏れが感じられない」、「異教的だ」という批判がおこったらしいのです。中世のガリレオの時代ならば、異教徒であるという烙印を押されることは、「異端審問」にかけられて死刑になることですから、そう考えるととても大胆なわけです。フォーレは19世紀から20世紀へ移行していく時代のフランスのアカデミズムの頂点にいた人ですが、ラヴェルの先生にもあたる。この曲のハーモニーはとても美しく、暗いところが僕は好きです。10代に入ったころから家にあったステレオで聴いていました。

「レクイエム」の中で一番好きなパートが、この「リベラ・メ」。これは「私を死への恐怖と苦しみからお救いください、神さま」という曲です。でも、もともとはカトリックのレクイエムのミサにはない曲で、ミサが終わったあとにやる曲なのですが、フォーレは、それを入れてしまっているんです。

子ども時代に誰の演奏で聴いていたかはもう覚えていなくて、でも、最初に聴いた演奏家のテンポとかニュアンスや強弱はインプットされてしまうので、体が覚えているものなのです。ここではシャルル・デュトワの演奏を挙げました。もちろん僕が聴いていた60年代に、デュトワはまだこの曲をレコーディングしていないのですが、「僕にとってのレクイエム」には一番近い感じがするので、これを選びました。

テンポや歌の強さがちょうどいい。強すぎても弱すぎてもいけない。激しすぎてもだめだし。裁きの日に私をお守りください、お救いくださいという曲なので、そのことを非常に切々と訴えるように歌わなくてはいけません。これが僕にとっての「リベラ・メ」なのです。



第16回

シューマン

ピアノ五重奏曲

変ホ長調 Op. 44

「自分の場所」が浮かび上がる
特別な曲

今回取り上げたのは、ブダベスト弦楽四重奏団とルドルフ・ゼルキンによるシューマンの「ピアノ五重奏曲 変ホ長調」です。作曲家というのは、ある特定の調で曲のメロディを思いつきます。この曲の始めに、力強い第一主題が出てきますが、とても変ホ長調らしい楽想なんですね。ほかに変ホ長調の有名な曲といえば、ベートーベンの「ピアノ協奏曲 第5番 皇帝」や「交響曲 第3番 英雄」があります。共通して威風堂々とした響きがある。シューマンのこの曲も、非常に骨太、加えて跳躍も多く、いきなり最初のメロディの間隔がオクターブより一つ少ない7度。跳躍するということは、実際に跳ぶのと同じで、とても大きなエネルギーが必要。だから、力強く印象的になります。

シューマンが書いた「ピアノ五重奏曲」は、この一曲しかありません。先駆的な曲に、有名なシューベルトの「鱈」があります。当然その影響もあって、シューマンはこの「ピアノ五重奏曲」を書いたといっただけでしょう。その後、この曲はブラームスやドヴォルザーク、フランク、20世紀になるとショスタコーヴィチにまで影響を与え続けていきます。

ピアノ五重奏曲を書いた作曲家は、そんなにたくさんいるわけではありません。音楽の歴史の中で確立された弦楽四重奏曲にピアノを加えるのですから、そう簡単ではない。この曲は「弦楽」対「ピアノ」という対比の上で書かれています。シューマンにとって、ピアノというのは、個人的にとっても結びつきが強い楽器で、ピアノ曲をたくさん残しています。奥さんのクララはピアニストでしたし、自身もピアニストになろうと思っていました。僕自身もピアノで作曲するし、やっぱりひと際思い入れがある楽器です。弦楽四重奏団に囲まれ、ピアノで対話する。ピアノという「自分の場所」が浮かび上がるんですね。

僕はこのブダベスト弦楽四重奏団とゼルキンの組み合わせが好きです。ゼルキンの演奏はすべてが好きというわけではないけれど、彼が弾いたモーツァルトの協奏曲はよかった。ブダベスト弦楽四重奏団は、演奏を現代的に革新したといわれていますが、その響きは、とても古風にも聞こえるのです。

第17回

ドビュッシー

組曲『子供の領分』

第3曲

「人形へのセレナード」

キラキラと輝く

ミケランジェリのピアノ

ドビュッシーの組曲『子供の領分』は、子どもが弾くために書いた曲集というわけではなく、歳をとってから誕生した愛娘、シユウシユウのために書いたものです。彼自身、ピアノの演奏が上手だったので、ドビュッシーの曲はテクニク的にも難しいものが多く、決して子ども向きではありません。でもこの『子供の領分』は、その中では比較的やさしく、僕も子どものころ、好きで毎日のように弾いていました。1曲目の「グラドゥス・アド・バルナツスム博士」という曲は、有名なクレメンティの練習曲をパロディにしたもので、大人になっても練習曲代わりに弾いていたこともあります。クレメンティの練習曲自体は、あまりにも退屈すぎて弾く気になるようなものではないのですが、ドビュッシーの曲は音楽的にも非常に素晴らしいです。

『子供の領分』には、ドビュッシーの批評精神や皮肉のエッセンスがふんだんに入っています。彼は10代のころからワグナーの影響を受けていたので、ワグナーの音楽との格闘の中から自分の音楽を作ってきたところがありました。この曲集の6曲目「ゴリーウオーグのケーク・ウオーク」の中間部では、なんとワグナーの『トリスタンとイゾルデ』のフレーズを大胆にも黒人音楽風に展開して遊んでいます。ワグナーが聴いたら、怒っちゃったでしょうね。ほかにも面白いことに、『子供の領分』の各曲のタイトルは全部英語で付けられています。フランスを代表する作曲家のドビュッシーが英国趣味だったのも不思議ですが、彼の唯一のオペラ『ペレアスとメリザンド』は、なんと初演で主役にスコットランド人の女性歌手を起用し、大問題になったぐらいですから。

さて、今回のおすすめは、4度という音程を多用した可愛い曲、「人形へのセレナード」。ミケランジェリ演奏の盤を選びました。彼はイタリア人のピアニストですが、僕は彼こそドビュッシーの弾き手として最高だと思っています。ものすごいテクニクをもつ人ですが、『子供の領分』のような比較的やさしい曲も、じつに美しく弾く。彼の演奏は、ほんとうに宝石や鉱物の結晶のように、キラキラとした美しさがあります。何度聴いても、その印象は変わりません。

第18回

シヨパン

幻想曲へ短調

作品49

父と母との思い出が蘇る

「幻想曲」

シヨパンの音楽は、曲によって好き嫌いがありません。たとえば、僕にとって「甘いシヨパン」の最たるものは「ピアノ協奏曲」ですね。あれは砂糖を食べているみたいで、もうとても聴けない。でも、「子守歌」や「幻想曲」、「スケルツォ」や「前奏曲」、「練習曲」などには素晴らしい曲がたくさんあります。子どものころに、ラヴェルの弟子で、素晴らしいピアノリストだったヴラド・ベルルミュテルが弾いたシヨパンのレコードをよく聴いていました。たまたま気がついたら、そのレコードが家にあっただんです。「変な名前の人だな」と思っていて、その後、彼がラヴェルから薫陶を受けたすごいピアノリストだと知りました。さて今回取り上げたのは、シヨパンの「幻想曲」です。幻想曲というのは、決まった形式があるわけではなくて、バロック時代に一番多く作られ、その後はあまり書かれなくなりました。モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトやシューマンらが書いているくらいでしょうか。自由な形式ということなのですが、シューマンとかシヨパンくらいになると、あまりにも自由では逆に作れないので、ソナタ形式を幻想曲の中にもち込んで作るということになりました。かなり拡大解釈されたソナタですが。

この曲の冒頭のメロディが、中田喜直作曲の「雪の降るまちを」とそっくりなので、びっくりするかもしれません。もちろん中田喜直は、シヨパンが大好きでしたから、知っていてあえて書いたんでしょう。これは、中田喜直だけじゃなくて、同じようなテーマをドヴォルザークも使って書いていますから、それだけシヨパンのこの旋律は、人を魅了する力をもっているのでしょう。僕も「雪の降るまちを」は子どものころから大好きでした。曲としても、とてもよい曲です。一方、シヨパンの「幻想曲」のほうは、ものすごく変化に富んでいて、子どもにとってはよくわからない、山あり谷ありの難しい曲でした。

ベルルミュテルのアルバムを聴いていて、この曲がかかると、母だけでなく厳しかった父でさえ、「あつ、あの曲だ」などと言って、必ず「雪の降るまちを」の話題になりました。僕にとってそういう思い出のある曲です。

第19回

ラヴェル

ソナチネ 第1楽章

宝石のように美しい

「ソナチネ」

自身が、優れたピアニストでもあったラヴェルは、ピアノ作品をたくさん作曲しました。有名な「亡き王女のためのパヴァーヌ」「夜のガスパール」「マ・メール・ロワ」「クープランの墓」など、どれも素晴らしい。今回ご紹介する曲「ソナチネ」は、タイトルからもわかる通り、古典的な装いがあります。モーツァルトの「ソナチネ」などとはずいぶん違います。3つの楽章から成る、きちんとしたソナタ形式で書かれています。子どもにとつては、わかりやすい形式なので、僕もよく弾きました。特に、1楽章のテーマは流麗で、小刻みに震えるような伴奏と、わかりやすい旋律が和声と重なり、じつに女性的。第2楽章は、シンブルさの中に、モーツァルトの時代にはなかったようなハーモニーで色付けされ、宝石のような美しさです。

この曲は、ある雑誌が主催した作曲コンクールのために書かれました。入選したのはラヴェルひとりだったそうですが、思えばとても変ですよね。彼が、この「ソナチネ」を書いたときには、有名な「水の戯れ」も「亡き王女のためのパヴァーヌ」も、すでに作曲していて脂がのっているころ。どうして応募したのか、ちよつと謎です。

今回は、マルタ・アルゲリッチのものを取り上げました。彼女の演奏は、一般的な印象としては、とても速度が早く、「激しい」と思われがちですが、非常に丁寧で、端正に弾いています。エモーショナルだけれども、ものすごいテクニクのもち主で、僕は好きです。

僕が高校生のころは、ラヴェルの楽譜は、まだ著作権が保護されていて、フランスのデュラン社という出版社から出ているものしかありませんでした。子どもにとつては、それは驚くほど高い値段で、比較的短い曲の「ソナチネ」でも、何千円もしました。なかなか買えない高い壁でした。デュラン社の楽譜は大きくて、綴じていないのです。ただ、ただんであるだけなのだけれど、紙質も良くクリーム色で、ありとあらゆるところがカッコいい。モノに対するフェティッシュを、満足させてくれるところがありました。今でもデュラン社の楽譜は伝統的な形を守っているのですが、僕にとつて、とても強い憧れを抱かせるものです。



第20回

エリック・サティ ジムノペディ 第一番

互いの才能を知り尽くした
ふたりの「ジムノペディ」

サティが作曲した「ジムノペディ」は3曲からなりますが、彼の代表作といってよいほど知られています。じつは、そのうちの1番と3番を、ドビュッシーが管弦楽曲に編曲しています。サティによる原曲は、もちろんピアノ曲。サティはピアノ曲をたくさん書いています。それはそれで、すごく好きなのですが、このドビュッシーの編曲もまた、とても面白い。サティの大きな特徴は、19世紀のロマン派から大きく遠ざかっていくところにあります。そこには、20世紀の前衛へと向かっていくところとする、大きな欲求があるのです。ところが、ドビュッシーが編曲したほうは、非常に19世紀的で、もやっとしています。サティが作った非常にクリアでシンプルな音楽を、19世紀の象徴主義を代表するオディロン・ルドンの絵のような世界に引きずり込んでしまっているのです。それが面白い。何か悪意のようなものさえ感じられるくらい。いや、悪意とまではいなくても、たっぷり皮肉を含んだドビュッシーのほくそ笑む顔が見えるようです。

サティとドビュッシーは、互いの才能を一番よく知っていた仲でした。ドビュッシーはサティの才能を高く評価していたし、彼が19世紀的なものを否定しているのをわかったうえで、あえてこのような編曲をしたのでしょう。さて一方、サティはどう思ったのか。うれしい反面、こんなもやもやした音楽は自分ものではないかと思っただけではないでしょうか。ドビュッシーから見れば、サティの原曲は単純で、何の技巧もほどこされていない、あまりにもむき出しの音楽に見えたのでは。たしかにサティはドビュッシーに比べて、ピアノがそんなに上手くはなかった。だから書く曲もシンプルなものが多い。ただ、単にピアノの上手い下手というよりも、サティはそれまでのロマン派の重い情感にまみれたような音楽を、一度すっきりクリアにしたかったのではないのでしょうか。

ドビュッシー編曲版を録音したものは、そんなにはありません。その中から今回は、カルタンバック指揮のものを取り上げました。僕はサティの「ジムノペディ」オリジナル版も、ドビュッシー編曲版も、どちらも好きです。聴き比べてみると、ふたりの関係が見えてきて、とても面白いのです。

第21回

シューベルト

4つの即興曲

作品90 D899

第4曲 変イ長調

19世紀の音楽を

想像するよるこび

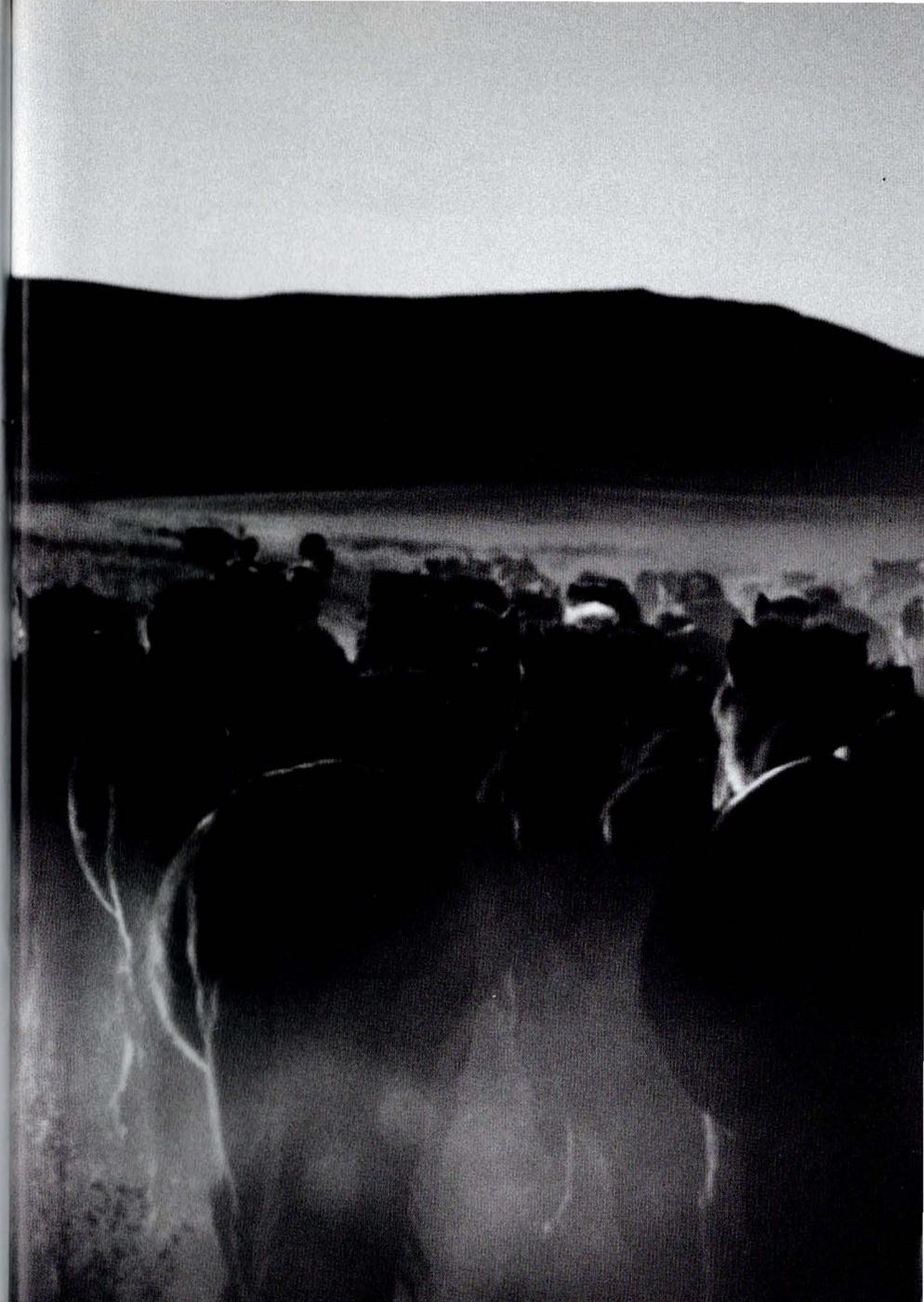
長い間、僕はシューベルトがそれほど好きではなかったのですが、最近なぜか気になっています。この「4つの即興曲 第4曲」は有名なので、子どものころから耳に残る曲で、こんな音楽を華麗に弾けるようになったらいいなと思っていました。ピアノで弾くのは、けっこう難しいけれど、曲は非常に単純です。最初のテーマのところもアルペジオ（分散和音）で、音楽としては難しくありません。

作曲の先生たちはシューベルトの音楽について、彼の曲は形式が破綻していると、よく言っていました。たとえばソナタ形式では、第1主題と第2主題が際立たなければいけないのに、シューベルトの場合、主題と主題の間にもいいメロディがありすぎて、主題が引き立たない。メロディが溢れ過ぎていて、形式がボロボロだと教わったので、そう思っていたのですが、今、違う見方をしてみると、シューベルトはなかなか面白い。

今回は、アルトゥール・シュナーベルが演奏したものを取り上げました。彼のピアノには、19世紀的な演奏法やテンポの取り方が感じられます。19世紀のテンポは、20世紀に入ってからのもとは随分違っていったのだと思います。19世紀の世界で、どんなふうにも音楽が弾かれていたのか。フルトヴェングラーの録音なども残っているので、19世紀の音楽を思い浮かべることができませんが、実際のところはわかりません。ほかにも、19世紀末に活躍したドビュッシーの演奏も残っていますが、聴いてみると、「何だこれは？」と思うほど、テンポが揺れている。その後のラヴェルの時代になると、今の演奏に近づいていて、20世紀に入ると、現代のような弾き方になっていきます。

ですから、このシュナーベルによる演奏は、19世紀的な音楽を探る手がかりのひとつもいえます。19世紀の人たちはどんなふうにも音楽を聴いていたのか。僕はずっと関心がありました。19世紀の香りがするものに飢えているというか、譜面は同じだけれども、そこから出てくる音を想像するのは面白い。100年ちよっと前のことなのに、よくわからな

いからこそ、とても惹かれるのです。



第22回

ジョン・ダウランド 涙のパヴァーヌ いにしえの涙

憂愁に満ちた
ダウランドの古楽

僕が子どものころはまだ、古楽のレコードは、ほとんどありませんでした。聴くチャンスもないし、ましてやコンサートなど、まるでやっていない。ロック後期以降の音楽が一般的で、いわゆる古楽と呼ばれるバロック前期や、それ以前の音楽には馴染みがなかったんです。でもこの20年、30年は、なぜか古楽がブームとなり、その勢いはますます増えています。

今回はジョン・ダウランドの「涙のパヴァーヌ いにしえの涙」を取り上げました。ダウランドの曲は、「なんでこんなにメランコリックなの？」と聴くほどに不思議な気持ちに襲われます。同時代のヘンリー・パーセルやほかの作曲家でも、ダウランドほど憂愁に満ちた作品を作った者はいません。ロンドンで生まれ、イギリスは国教会なのに本人はカトリック教徒だったためか、改宗したのではないかといろいろな言われますが、実際、彼がどんな生涯を送ったのかあまり知られていません。理由はともかく、この深いメランコリックさが、僕をずっと虜にしてきました。

この曲は当時、ヴィオールという楽器により演奏されました。これはヴァイオリンが現れる前に、広く使われていた弦楽器。ヴァイオリンのように高周波がないので、さらびやかな音色ではなく、どちらかというところ「わびさび」です。この時代、音楽は大きな会場ではなく、貴族の館などでご飯を食べながら楽しまれていたので、楽器も大きな音を出す必要もなかった。ヴィオールの音でダウランドを聴くと、心にしみるような、しみじみしたものがあります。逆に言うと、ダウランドはヴィオールじゃないと聴けない。ヴァイオリンだと泣きが入ってしまって、センチメンタル過ぎるでしょう。

演奏は、フレットワークというグループです。彼らには、僕のソロアルバム『out of fashion』にも参加してもらったことがあります。活動がとても面白く、彼らのCDは欠かさず聴いてきました。現代曲も演奏しますが、ピリオド奏法による古楽が中心です。彼らの演奏を通して古楽に触れてきたといっても過言ではありません。僕にとって古楽とは、古いものではなく、とても新鮮なものなのです。



第23回

モーツァルト

セレナーード第10番

変ロ長調 K.361

「グラン・パルティータ」

第1楽章

鬼才が振る、
ユニークで刺激的な曲

今回取り上げたのは、モーツァルトの管弦楽曲「グラン・パルティータ」。演奏は、現代音楽の鬼才ピエール・ブレーズ指揮によるアンサンブル・アンテルコンタンポランによるものです。この曲には二重の面白さがあります。

まず、曲は12の管楽器と1つの弦楽器で構成されています。オーボエ、クラリネット、バセットホルン、ファゴットが各2、ホルン4に、コントラバスが1。1つのコントラバスの代わりにコントラファゴットが用いられることが多く、そうなる13管楽器となります。こういう編成がモーツァルトの時代に一般的だったとは、とても思えない。当時、貴族がミュージシャンや楽団を抱えていて、作曲家たちは彼らのために書くことが多かったのです。そういう理由によるものかもしれません。じつに不思議な編成で、興味深い曲です。その不思議な曲をブレーズが取り上げているわけですから、さらに面白い。僕にとって、彼がブルックナーの曲を振ると同じくらいショッキングな出来事です。

ブレーズは、マーラーでもドビュッシーでも譜面通りにやる、つまり余計な解釈や情緒をもちこまないのが彼のスタイルです。それがいいところですね。でも同時に、彼の凄いところは「書かれていること」を全部聴かせるんです。ふつうの演奏家が行った目立たない部分を、すべてあからさまに陽に当ててしまう。だから、それが作曲家の意図通りかという、そうともいえないこともある。

アンサンブル・アンテルコンタンポランは、もともと彼自身が作曲した「ル・マルト・サン・メートル」という曲を演奏するために結成した楽団です。ブレーズの曲は現代音楽の中でも難曲で、初演のときに、なんと彼は30回以上もリハーサルをしました。今はメンバーがずいぶん変わりましたが、とにかく名手ばかり集めて結成されています。そういう腕の人たちですから、ふつうは初演といえど、リハーサルは1回ぐらいいのに、じつに30回以上。そんなことはまずないわけです。アンサンブル・アンテルコンタンポランが古典曲をやるのも珍しい。とにかくユニークで刺激的な組み合わせです。

第24回

ブラームス

4つのバラード 作品10

第4曲 口長調

弱音の中で際立つ

ミケランジェリの神業

ミケランジェリは、僕の好きなピアノリストのひとりです。ドビュッシーやラヴェルをはじめとする近代音楽の名手として有名ですが、ブラームスを聴いてみたところ、驚くほどよかった。とくに今月ご紹介する「4つのバラード 第4曲 口長調」は、長調と短調が行ったり来たりする曲調をもち、ロマン派の特徴が顕著です。よく本には、「不安定な心の葛藤」と書かれて紹介されています。やっぱり、長調と短調を行ったり来たりすると、女性の心と山の天気ではないけれども、どっちだろう？と、不安定に聴こえるわけです。僕は今まで、ロマン派の音楽はあまり聴いてこなかったのですが、ブラームスは古典的で聴きやすいので例外だったんですね。

ミケランジェリの演奏は、テクニクはもちろん、弱音のコントロールが完璧で、もう神業です。この曲のように、ゆっくりと静かで瞑想的な音楽だと、彼の素晴らしさが、よりいっそう際立ちます。超絶的なテクニクが必要とされる難曲より、こういう曲のほうがほんとは難しい。だから、びつくりするんです。

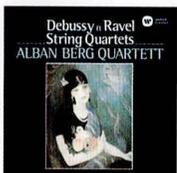
ちなみにリヒテルというピアニストも大変素晴らしく、ミケランジェリと並ぶほど大好きなんです。繊細な音のコントロールという点であれば、僕はやっぱりミケランジェリの方が上だと思います。ものすごく精密で、決して偶然はない。すべてがきちんと設計されているのだけれども、堅苦しくない。リヒテルは少し乱暴すぎるというか、ちよつと破綻しているところがあります。そこが逆に豪快で、彼の魅力なんですけどね。グールドも大好きです。グールドは解釈の人です。同じ音楽なのに、今まで弾かれてこなかった、まったく新しい解釈で弾くんです。

演奏により、音楽の聴こえ方や表情、もつと深いいうと、音楽がもっている思想みたいなものまでが、ほんとうにずいぶん変わってしまいます。演奏によってそれらが引き出されるのです。最近、何人もの指揮者によるブルックナーの「交響曲第9番」を聴き比べたりしています。長い曲なので時間はかかりますが、とても面白い。毎日毎日、音楽の愉しみがどんどん深くなってきている昨今です。

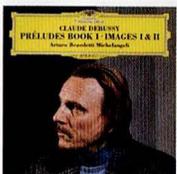




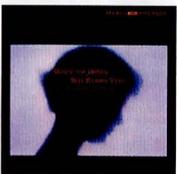
『マーラー：交響曲第10番～アダージョ、子供の不思議な角笛』
 ビエール・ブーレーズ指揮 クリーヴランド管弦楽団
 (ユニバーサルミュージック UCCG-1513)
 マーラー生誕150周年を記念して、昨年録音されたアルバム。ブーレーズは一貫して、完成された第1楽章のみ演奏する立場をとっている。



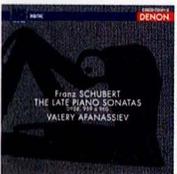
『ドビュッシー、ラヴェル：弦楽四重奏曲、他』
 アルバン・ベルク四重奏団
 (ワーナーミュージック・ジャパン WPCS-50079)
 1983年完成のドビュッシーの「弦楽四重奏曲」とその10年後に作曲されたラヴェルの「弦楽四重奏曲」を収めたアルバム。両者の作風の違いを楽しめる。



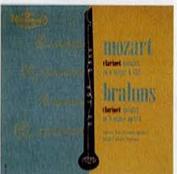
『ドビュッシー：前奏曲集第1巻 映像第1集、第2集』
 アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ (ピアノ)
 (ユニバーサルミュージック UCCG-2023)
 ドビュッシーのピアノ音楽の集大成ともいえる「前奏曲集第1巻」と「映像第1集、第2集」のカップリング。ミケランジェリの精緻な技巧と抑制の効いた格調高い演奏が見事。



『ワルツ・フォー・デビィ+4』
 ビル・エヴァンス・トリオ
 (ユニバーサルミュージック UCCO-5001)
 表題曲の「ワルツ・フォー・デビィ」をはじめ、「マイ・ロマンス」など、リリズム溢れる優美なナンバーを収録したビル・エヴァンスの代表作。ジャズ以外の音楽ファンにも人気の高い名盤中の名盤。



『シューベルト：ピアノ・ソナタ第19番・20番・21番』
 ヴァレリー・アフナシエフ (ピアノ)
 (日本コロムビア COCO-73141)
 31歳の若さで亡くなったシューベルトが死の直前に一気に書いたという最後の3つのピアノ・ソナタ。アフナシエフは極度に遅いテンポにより、シューベルトがディテールにこめた心情を丁寧に表現している。



『モーツァルト & ブラームス：クラリネット五重奏曲』
 レオポルト・ウラッハ (クラリネット)
 ウィーン・コンツェルトハウス四重奏団
 (ユニバーサルミュージック UCCW-3033)
 57歳のとき、自らの創作力に限界を感じ、遺書までしたためていたブラームスが、ひとりの優れたクラリネット奏者との出会いから新たな創作意欲を燃やし書き上げたという晩年の傑作。



『バッハ：インヴェンションとシンフォニア』
 グスタフ・レオンハルト (チェンバロ)
 (ソニーミュージック SRCR-2426)
 元はチェンバロのために書かれたバッハの楽曲を、チェンバロの巨匠、グスタフ・レオンハルトが当時の様式に立ち返り、忠実に再現した名盤。



『ショパン：スケルツォ全曲、子守歌、舟歌』
 マウリツィオ・ポリーニ (ピアノ)
 (ユニバーサルミュージック UCCG-6231)
 超絶技巧のピアニストとして知られる、イタリア出身のポリーニによるスケルツォ全曲集。「子守歌」は適度な速度と気品漂う演奏で定評がある。



『モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番 & 第25番』
 フリードリヒ・グルダ (ピアノ)
 クラウドイオ・アバド指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
 (ユニバーサルミュージック UCCG-5353)
 生粋のウィーンっ子、グルダとウィーンフィルとの共演。気品に満ちた演奏の中にも、グルダらしい奔放さが見え隠れする。



『ブラームス：間奏曲集 / 4つのバラードより / 2つのラプソディ』
 グレン・グールド (ピアノ)
 (ソニーミュージック SICC-1025)
 今なお、カリスマ的人気を誇るグレン・グールド。晩年のブラームスの作品から間奏曲ばかりを集めたこのアルバムは、ブラームスの枯淡の境地をグールドが切々と慈しむように弾いた、心揺さぶる名盤。



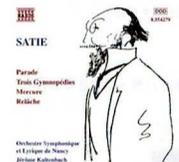
『ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第15番、18番、21番、30番』
 ヴィルヘルム・バックハウス (ピアノ)
 (audite AU23420)
 1969年、バックハウスが亡くなる3カ月前にベルリンで行ったライブの録音。晩年の演奏の到達点ともいえる躍動感溢れる音が聴ける。「audite」は社主ベッケンホーフ氏による高音質録音で高い評価を集める独デトモルトの老舗レーベル。
https://www.audite.de/en/product/2CD/23420-l_v_beethoven_piano_sonatas_wilhelm_backhaus.html



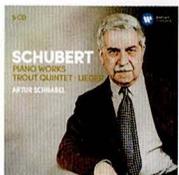
『ドビュッシー、ラヴェル：弦楽四重奏曲、他』
 アルバン・ベルク四重奏団
 (ワーナーミュージック・ジャパン WPCS-50079)
 精緻なアンサンブル、多彩な音色、豊かな表現力で知られるアルバン・ベルク四重奏団による名盤。2つの弦楽四重奏曲の聴き比べを堪能できる。



『ラヴェル：夜のガスパール、ソナティナ、高雅で感傷的なワルツ
[SHM-CD]』
マルタ・アルゲリッチ (ピアノ) クラウディオ・アバド指揮
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(ユニバーサルミュージック UCCG-6133)
マルタ・アルゲリッチと、アバド、ベルリン・フィルの共演による名盤。
1967年録音の「ピアノ協奏曲 Ⅲ長調」では、若き日のアルゲリッチと
アバドのみずみずしい演奏を聴くことができる。



『サティ：バレエ音楽「バラード」／3つのジムノペディ／バレエ音楽
「メルキュール」／バレエ音楽「ルラーシュ」』
ジェローム・カルタンバック指揮 ナンシー歌劇場交響楽団
(輸入盤 Naxos 8.554279)
ドビュッシー編曲の「ジムノペディ 第1番」と「3番」、ローラン＝マニユ
エル編曲の「第2番」ほか、サティのバレエ音楽を収録した貴重盤。



『Schubert: Piano works, Trout, Lieder』
アルトゥール・シュナーベル (ピアノ)
(輸入盤 Warner Classics 9029.563376)
シュナーベルが亡くなる前年(1950年)の最後の録音ともいわれる即興
曲ほか、シューベルトのピアノの名曲を揃えたコンピレーション。ペー
トーヴェンの演奏に定評があるが、この即興曲の、水の上を転がるよう
な流麗な演奏も素晴らしい。



『Night's Black Bird』
フレットワーク
(配信限定 Warner Classics 0077775953954)
ダウランドの「ラクリメ、または7つの涙」の全曲ほかを収めたアル
バム。ルネサンス音楽の作曲家で「ブリタニア音楽の父」とよばれる
ウィリアム・バードの「ファンタジア」などもカップリングされている。



『ベルク：室内協奏曲、モーツァルト：グラン・パルティータ』
ピエール・ブレーズ指揮 アンサンブル・アンテルコンタンポラン
(ユニバーサルミュージック UCCD-1215)
ブレーズ初めてのモーツァルト録音として話題を呼んだ「グラン・
パルティータ」。同時収録されているベルク「室内協奏曲」では、ピ
アニスト・内田光子と名ヴァイオリニスト・テツラフの共演も聴ける。



『ブラームス：4つのバラード、他』
アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ (ピアノ)
(ユニバーサルミュージック UCCG-4664)
ブラームスの4つのバラードなどを収めたピアノ曲集。ミケランジェリの
精緻な演奏を存分に堪能できる。



『Beethoven Piano Concerto No. 3 in C Minor』
グレン・グールド (ピアノ) レナード・バーンスタイン指揮
コロムビア交響楽団
(輸入盤 Sony-BMG Europe 88697147572)
1959年、ニューヨークで録音された、歴史的な名盤。ベートーヴェンのピ
アノ協奏曲でのふたりの共演は、この第3番のほか、第2番、第4番で
も録音されている。



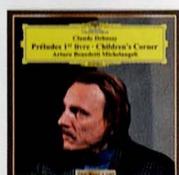
『バッハ：平均律クラヴィア曲集第1巻 (全曲)』
グスタフ・レオンハルト (チェンバロ)
(ソニーミュージック BVCD-38096)
古楽器演奏の第一人者として知られる世界的なチェンバロ奏者、グ
スタフ・レオンハルトによる傑作。チェンバロによる突出した名盤として
高く評価され、オランダのエディソン賞を受賞。



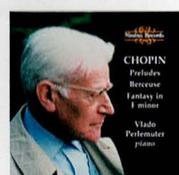
『フォーレ：レクイエム、ベレアスとメリザンド、パヴァーヌ』
シャル・デュトワ指揮 モントリオール交響楽団ほか
(ユニバーサルミュージック UCCD-50048)
モーツァルト、ヴェルディの作品とともに「三大レクイエム」のひとつと
される。初演は1888年、パリ・マドレーヌ寺院にて。この盤はデュ
トワの繊細な指揮とキリ・テ・カナワの清らかな声に定評がある。



『Schubert: Piano Quintet 《The Trout》; Schumann:
Piano Quintet, Op. 44』
ルドルフ・ゼルキン (ピアノ) ブダペスト弦楽四重奏団
(輸入盤 SONY CLASSICAL 5128722)
20世紀を代表するピアニストの一人、ルドルフ・ゼルキンの「ルドルフ・
ゼルキン・エディション」シリーズからの一枚。こちらはシューマンが
影響を受けたと思われるシューベルトの「ピアノ五重奏曲 鱒」とのカ
ップリング。



『ドビュッシー：前奏曲集第1巻、子供の領分』
アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ (ピアノ)
(ユニバーサルミュージック UCCG-5295)
組曲「子供の領分」の全6曲のほか、ドビュッシーのピアノ音楽の集大
成ともいわれる『前奏曲集』第1巻をカップリング。「亜麻色の髪の乙
女」「沈める寺」などの名曲も楽しめるお得な一枚。



『ショパン：24の前奏曲／幻想曲へ短調 作品49／子守歌 変ニ長調 作品57』
ヴラド・ベルルミュテール (ピアノ)
(輸入盤 NIMBUS RECORDS NIM5064)
現在入手できるベルルミュテールのアルバムは極めて少なく、ショパ
ンの「幻想曲 へ短調」を収録した盤はこちらのみ。「24の前奏曲」「子
守歌」も含め、貴重な演奏が聴ける。